山間集落における集落景観保存に関する基礎的研究

—徳島県祖谷地方における景観変遷の調査から—
Landscape Preservation in a Village Among the Mountains
-- A Case Study of Iya District in Tokushima Prefecture--

宮崎美夏* 小嶋雅代** 増井正哉**

Minatu Miyazaki Masayo Kojima** Masaya Masui**

(*奈良女子大学大学院人間文化研究科 **奈良女子大学生生活環境学部)

(*Division of Human Culture Nara Women's Univ. **Department of Residential Environment Nara Women's Univ.)

I 研究目的と調査対象集落

1, 研究の目的

伝統的な集落景観保存に関心が集まるようになって久しい。そして、国の重要伝統的建造物群保存地区（以下重伝建地区とする）に選定される集落が増えてきた^{※1)}。重伝建地区制度は事業期間の限定がなく、建造物や環境物件の修理・修景が可能で、農村計画の立場からも重要なツールである。ただ、この制度で集落景観の保存を考えると、従来の町並み保存とは異なる課題がある。とくに集落の環境条件、農業生産を中心とする生業^{※2)}と集落景観の関係は重要である。たとえば、早期に廃村状態になった集落は別として、現在も人々が生活する集落では伝統的形態をそのまま継承している場合はまれで、なんらかの変化が加わることは当然である。とくに山間集落では、その独特の環境条件、生業の特徴から、必然的な変化を見ることが多い。そのため、伝統的形態から現状にいたる変化を的確に意味づけ評価する必要がある。これが評価されないと、環境条件・生業の特徴が景観に表れていても、保存対象としての意義を見いだせなくなる可能性があり、集落が保存対象になった際にも、建造物の修理・修景の際に、ある時代以前（重伝建地区では通常、昭和戦前期以前とされる）の形態へ復旧が求められ、じっさいの生活上の困難が生じる場合があるからである。

本論文は、徳島県三好郡東祖谷山村の1集落・落合をとりあげ、集落の景観の変遷を明らかにし、

図1 集落全体図

今後山間集落の景観保をすすめていく上で、景観変遷と現状の再評価しようとするものである。なお、本論文は平成13年度徳島県東祖谷山村伝統的建造物群保存対策調査の成果の一部^{※3)}である。

2, 調査対象集落

徳島県祖谷地方は徳島県の西端、高知県との県境に位置した山深い地域であり、平家の落人伝説でよく知られている。落合集落はこの地方のほぼ中央に位置し、祖谷川と落合川の合流点に開けた集落である。急傾斜という過酷な地形条件にあり、

もっとも低い位置にある民家ともっとも高い位置にある民家との高度差は約 250mもある。敷地形状、建物配置も独特で、現在でも茅葺き民家が他の集落より、比較的多く残っており、斜面に立地する伝統的民家や石垣などで構成される独特の景観をもつ。さらに、他集落では耕作放棄された傾斜地の畑地に杉を植林することが一般的で、集落を一望する景観が得られる場合はまれである。落合集落では植林が少なく対岸から民家と畑地からなる集落景観全体が捉えられる。

しかしながら、景観を集落単体で見ると集落として一体感のある歴史的な集落景観を維持しているものの、屋敷地の単位、個々の建物の単位で見ると、伝統的形態に変化があることがわかる。

II 集落景観の構成要素

集落景観の構成要素として以下があげられる。

①屋敷地—急傾斜地のため、等高線に沿って細長い屋敷地しか確保できない。ほとんどの民家が山腹の傾斜地にへばりつくように建つ。②石垣—急傾斜地で水平面を確保する機能をもつだけでなく、屋敷地とともに景観の重要な構成要素になる。③道（赤筋道・自動車道）—現在、集落内には2種類の道が通っている。そのうち赤筋道と呼ばれる古道は、集落内を東西南北に通っており、住民の日常生活および儀礼時においても利用される。自動車道路は昭和 37 年ごろに他集落を結ぶ林道として建設された。その後自動車の普及により次々と建設され、集落中央部の数軒を除いて、ほとんどの屋敷地につながっている。④田畑—集落面積のうち畑地の占める割合は圧倒的に高い。屋敷地や水田と異なり、水平にならず、斜面のまま利用している。現在は耕作放棄が多くみられる。水田はもともと急傾斜地に作るの難しく、祖谷地方でも本集落は少ないほうであり、現在は水路沿いに4枚見られるのみである。⑤林—防風林として古くからある林と、木材販売用に植林した林がある。植林に関しては、木の陰が作物の生育の妨げとなることから、植林をしないことがこの集落の慣習になっている。このため他集落と比較すると植林が少なく、斜面状にひろがる集落景観を

残している。本論文では特に屋敷地と民家の外観について、現状と変遷要因を明らかにする。

III 調査概要

調査対象範囲は、落合集落のなかでも伝統的民家のよく残る落合公民館より上とする。調査概要は表1の通りである。現状は②と③、変遷については①、②、④の調査から明らかにしていく。

IV 伝統的民家の形態

1. 屋敷構え

まず、実測調査で明らかになった伝統的民家の屋敷構えと建物の外観の形態を述べる。屋敷構えについては図2に示す通りである。屋敷地は急斜面を切盛りして前後に石垣を築いて敷地を造成している。したがって、等高線に沿って長く奥行きは浅い。建物は山を背に谷に表を向けて建ち、す

表1 調査概要

調査期間			2001年 6月9日、7月23~29日、 8月31日~9月22日、11月3~7日
調査項目	調査内容	対象	
①史料調査	地籍図、建物台帳、農道台帳		
②実測調査	平面、断面、立面、配置、復元	33軒	
③景観調査	建物台帳の作成、建物外観調査 屋敷地現状調査	54軒 99棟	
④ヒアリング調査	建造年代、屋敷地・建物の変遷 社会組織・集落の歴史	35軒

図2 伝統的な配置形態

図3 連続立面図

ぐ背後に石垣が迫る。表側には主屋から石垣まで3m前後の外庭をとり、農作業の場として使われる。

屋敷地内の建物配置には、主屋を中央におき、両側に納屋、隠居屋を配すもの（以下、敷地内3棟並びとする）と主屋の隣に納屋、隠居屋を配すもの（以下、敷地内2棟並びとする）がある。付属屋には納屋、隠居屋があるが、納屋は農作業の道具置き場、ウマヤ、タバコ乾燥室など必要に応じた用途に転用された。祖谷地方は長男が結婚するとその親と兄弟が隠居屋に移り住むという隠居制が長く残り、そのための施設として隠居屋が建てられた。隠居屋は納屋と併用されていた場合もあった。これらより一段低い位置に別棟の便所を配している。アプローチは敷地の条件により正面からではなく、古道を上り切った建物の側面、背面からとなり、景観の特徴の1つになっている。

2. 民家の外観

伝統的民家における主屋の外観は、寄棟造の茅葺きで、壁面は土壁または竹を割って縦に並べるひしやぎ竹仕上げである。また、正面に外縁があり、ここが日常の出入り口であった。この縁の間には前便所があった。

V 屋敷地

1. 現状

①敷地規模 敷地の規模を把握するため実測した33軒を対象とし、奥行き・敷地幅・建物から前面の石垣までの前面距離を配置図より計測した。結果を表2に示す。奥行きはほとんどが10～18mの範囲内で、敷地幅は30～50mが16軒と多い。前面距離はさまざまであった。建物の背面は石垣まで約1mあり、現在では屋根からトタンの底を石垣

表2 屋敷地の現状の調査結果（33軒）

敷地規模				
敷地奥行き	10～14m	14～18m	18m以上	
棟数	16	15	2	
敷地幅	15～30m	30～50m	50m以上	不明
棟数	11	16	4	2
前面距離	1.5～3m	3～6m	6m以上	不明
棟数	15	12	4	2
建物配置				
敷地内3棟並び	敷地内2棟並び	1棟	建物間に距離あり	不明
9	15	17	7	6

まで出し、その底下を物置として使用している事例、石垣との間を増築している事例がみられた。

②建物配置 伝統的形態である敷地内に建物が2棟もしくは3棟並列する事例は24軒ある。その他は1棟のみが建つ事例が17軒、敷地内でも建物が並列しない事例が増えつつあり、景観に大きな変化をもたらしている。

③アプローチ 建物側面、背面からの伝統的なアプローチに変化があるものは17軒ある。いずれも道路から直接敷地に入るものとなっている。

2. 変化の内容

①宅地数 戦後の5軒増加のみで変化は少ない。
②敷地形状 等高線に沿った細長い敷地に大きな変化はないものの、敷地前面の拡幅がみられるものが20事例ある。拡幅パターンは大別すると自動車道路沿いとそれ以外のものがある。敷地拡幅のパターンを図4に示す。自動車道路の影響を受けていない屋敷地の拡幅パターンにはa.石垣（6事例）、b.コンクリート（2事例）を使用した方法と、c.ヤマト（1事例）と呼ばれる伝統的方法がある。自動車道路建設による屋敷地の拡幅パターンは、道路と敷地が同じ高さの場合（4事例）と道路と敷地が近接している場合（7事例）があるが、いずれも敷地前面の石垣が消失し、コンクリートの法面が景観に大きく影響する。またアプローチも

図4 屋敷地拡幅のパターン

③建物配置 配置の変化パターンを図5に示す。
「敷地内3棟並び」の場合は12事例中、敷地内3棟並びを維持している事例が5事例、建物が新しく建設された事例が2事例、建物が取壊された事例が5事例ある。「敷地内2棟並び」の場合は11事例中、敷地内2棟並びを維持しているものが8事例、「敷地内3棟並び」に変化したものが3事例で、おおむね並列した配置が維持されているといえる。建物が増加したものは、生業の変化に伴いタバコ乾燥室、養蚕室の建設があり、減少したのものには納屋、陽居屋、主屋がある。

建築当初に主屋として建てられたもの 47 棟を対象とし、外観の現状と変遷をみていく。現状については図 6 に示す。現在居住している建物は 34 棟(72%)あり、残り 13 棟は空家となっている。

①建造年代 ヒアリングで明らかになったものと実測調査の際発見した棟札や柱のすすけ具合、仕上げなどから建造年代を推定したものがある。江戸中期は7棟(14%)、江戸後期は4棟(8%)、

①屋根 屋根は建物のフレームを決定付ける景観上重要な要素である。茅葺き屋根の変化には、茅葺き屋根をトタンでおおったものが8事例、小屋

下げが9事例みられた。それぞれの断面を図7に示す。トタンでおおうことは他の地域でもよくみられる事例であるが、棟の位置を下げて屋根の構造を変化させる小屋下げは、祖谷地方でよくみられる手法である。小屋下げは茅の傷みが激しく、トタンをかぶせることも不可能で、茅葺き屋根を維持できない場合に起こる改変であり、屋根形態は大きく変化する。しかしながら、屋根裏の空間を失う一方で、副次的な効果として軒高を高めることができる。また屋根が変化するのみで内部空間はそのまま維持することが可能である。

②壁面・建具 特異な事例はみられず、壁面は土壁のうえに全面もしくは一部をトタンで補強する事例を19事例、建具は木製建具からアルミサッシにする事例を18事例確認した。壁面についてはトタンの内側に伝統的要素が残っているため、今後、伝統的外観への修景が可能である。

③増築 増築による外観への影響は建物正面、正面以外の2点からみていくことができる。

i) 建物正面 建物正面では前便所がとりはわれ、玄関の増築が景観に大きな影響をもたらしている。玄関の取り付け方は図8のように4つのパターンがみられる。内縁を内部に取り込み、祖谷地方の特徴といえる建物正面便所がなくなって、代わりに玄関という機能の全く異なる要素が入れ替わったことは景観に大きな変化をもたらした。

ii) 正面以外 建物の正面以外の増築で、外観に影響をもたらしているものは、おもに便所、風呂、台所の増築である。図9のようにオモテの横には便所、風呂がくる事例(6事例)が多く、ウチの横、奥には台所がくる事例(7事例)が多い。

響を及ぼしていることがわかる。屋敷地に関して昭和30年以降、敷地形状、建物の配置が自動車道建設に伴い、徐々に変化している。また主屋の外観の変化に関しては、昭和40～50年代にかけて集中的にみられ、とくに屋根の改変を契機にその他の改変、増築がされることが明らかになった。

ここでは生業の変化、基盤整備、地域社会の変化と関連づけて考えたい。基盤整備のうち道路については前述しているので、ここではとくに、生業と地域社会について述べておく。

表3 主屋の外観の変化内容

変化する場所	内容	棟数
改変	屋根	茅葺き屋根にトタンをはる 8
	小屋下げ	9
	壁面	土壁にトタンはる 19
	建具	障子→アルミサッシ 18 木製ガラス戸→アルミサッシ 1
改築／増築	建物正面	前便所の撤去 6
		玄関の機能の取付け 10
		部屋(予備・子供部屋) 4
		外縁を内縁にする 6
増築	建物正面以外	外縁の撤去 3
		便所 8
		風呂 7
		台所 7
		部屋(予備部屋) 3

図7 小屋下げの改変事例の断面図

図8 玄関の増築

図9 正面以外の増築

Ⅶ 変化の時期と背景

1. 時期

変化の時期について、ヒアリング対象者の居住歴や年齢などにより明らかにできた期間には差があったが対象者の記憶の範囲内では昭和30年以前には大規模な改変がなかったことが明らかになった。図10のように生業の変化と社会的背景を照らし合わせ、屋敷地、主屋の外観の変化を見ていくと、それぞれの変化が屋敷地、主屋の外観に影

落合ではもともと、三稜や麦の生産が中心であったが昭和 30 年代には廃れた。それに代わり養蚕がはじまり、昭和 50 年代に最盛期を迎えたが根付かなかった。

また、高齢化・過疎化が深刻になるのは昭和 40 年代からで、隠居制は現在も続いているものの、新世代が転出するために隠居家に移る必要がなくなった。環境管理の互助組織である組^{※7)}も同じ頃から機能しなくなった。こうした背景と集落景観の変容を関連づけると次のようになる。

屋敷地に関しては、敷地形状は基盤整備に伴う自動車道路建設の影響が大きい。建物の配置には、敷地内棟数の増加要因として生業の変化に伴うタバコ乾燥室、養蚕室^{※8)}の建設、減少要因として農業の衰退、隠居制の衰退に伴う隠居屋、納屋の必要性の消失が変化をもたらしている。

つぎに主屋の外観に関しては、生業が、屋根の空間の利用が必要な葉タバコから屋根裏の空間が不要で、室温の調整の必要な養蚕に変化したことが、屋根の改変に大きく影響している。また、単に老朽化だけでなく、茅葺き屋根の維持に必要な社会組織としての組の機能が人口の減少、高齢化などにより低下したことも影響している。

VIII まとめ

以上、落合集落の屋敷地と建物外観について、変化とその背景について調査検討を行った。その結果、変化の背景は住宅レベルの環境改善要求、隠居制の衰退、社会組織の機能低下、基盤整備、農業政策などが複合的に関連していることが明らかになった。社会組織・生活慣習の変化に加え、とくに生業の変化が現在の独特な景観の形成に影響していた。今後、このような山間集落の景観保存を考えるにあたって、伝統的な形態の残存度に加えて、過酷な環境のなかで変化してきた過程を含めた評価を行うことが必要であると考えられる。

This paper, taking one village in Higashi Iiyama-son, aims to grasp the present situation of premises and buildings and its process of change as a basic data, and to make clear the factors of the change. We examined 99 residences in the village and found out some factors such as a change of the social organization and the custom of life, which relate complicatedly as a cause of the change of landscape. In addition, the change of an occupation especially influences the present characteristic view. We have to estimate not only how much the traditional figure remains but process of change through severe circumstances for considering landscape preservation.

図 10 変遷履歴

※1) ここ5年間で6地区が選定された。

※2) 重伝建地区に限定した内容ではないが、平成13年度文化財保護審議会の答申でも、この2点の重要性が指摘されている。

※3) 平成13年度調査については、本稿であつかった「屋敷地と建物外観」のほか、民家の建築史的調査と改造傾向の分析、石垣の分布と保存上の技術的・社会的問題の検討、民俗行事と集落・民家の形態の継承との関係に関して、その成果を報告している[宮崎・小嶋・増井・米田麻衣子・坪井千尋・上野邦一(2002):「徳島県祖谷地方の山間集落における景観保存に関する研究その1～その2」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第43号集落景観]。集落景観を構成する他の要素(石垣・畑地・山林・水路・地域文化財など)の保存について、その技術的・社会的検討が必要であることはいうまでもない。平成14年度の調査をふまえて、適切な保存計画を策定していきたいと考えている。

※4) 祖谷地方の茅葺き屋根の形状は奇棟造であるが、トタンでおおう改変が行われた場合、破風をつくり入母屋に似せた形状になる。

※5) 壁面、建具は、建物の正面を右側、建物の背後を山側、むかつて右側面を右側、左側面を左側とする。また、1面に対して素材を2つ以上確認した場合は複数回答とした。

※6) 落合集落内には5つの組があり生産組織や儀礼等の地縁的な社会組織として機能していたが、現在では機能しているのは祭礼時のみである。

※7) たばこ乾燥、養蚕室は主屋内で行われることが多かったが生産に積極的な農家は屋敷地内に専用建物を建てた。